

中学生の地域への愛着に関する意識の変容に関する探索的検討
—茨城県神栖市の中学校における地域学習関連講演を事例として—
An Exploratory Study on the Change in Junior High School Students' Attitudes
toward Place Attachment: A Case Study of a Lecture Related to Regional
Learning at a Junior High School in Kamisu City, Ibaraki Prefecture

中村 和彦

NAKAMURA Kazuhiko

東京大学大学院新領域創成科学研究科

[要約] 子どもの地域への愛着を高めるための一般性の高い効果的な教育方法を確立するためには、地域への愛着の形成過程に関する知見の蓄積が必要である。本研究では、茨城県神栖市の中学校で行われた地域学習関連の講演を事例として、講演の前後における対象生徒の地域愛着に関する意識変容に着目し、それぞれの変容パターンに該当する生徒らが有する特徴の探索的な検討を目的とする。中学校1年生を対象に、生徒の属性や選好・習慣と地域への愛着に関する質問紙調査を実施し、生徒の選好や習慣と地域への愛着に関する意識との関係を多重比較により分析した。地域への愛着に関する意識が相対的に高い生徒には、「旬の野菜への意識が高い」「近所の桜の開花に関心がある」「地域の将来像への意識が高い」などの特徴がみられた。講演後に地域への愛着に関する意識が上昇した生徒には、「総合学習の時間への関心が低い」「写真を撮る頻度が低い」「冷房温度への配慮が低い」などの特徴がみられた。

[キーワード] 地域学習, 地域への愛着, 中学生, 多重比較, 神栖市

1. はじめに

環境保全においては、その地域の住民が地域への愛着を有していることが、環境保全行動に繋がる要因の一つであると考えられている(桜井ら 2016)。このことから、子どもの段階から地域への愛着を高めるための教育的な取り組みが、すでに数多く行われている。しかし、これらの取り組みにおいては、その成果として事後に地域への愛着が高まることが確認されるものの、その要因となる子どもの属性や特徴が量的分析を伴って検討されていない。より一般性の高い効果的な教育方法の確立に向けては、学習活動を通して地域への愛着がどのように形成されるかに関して、さらなる研究の蓄積が必要となる。

地域への愛着を高めるための教育については、その主なものとして、小学校第1・2学年の生活科が挙げられる。しかし、小学校生活

科において育む地域への愛着は、冒頭に述べた環境保全行動に繋がるような大人のもてるそれとは異なると指摘されている(加藤 2009)。つまり、小学校生活科で育まれた地域への愛着の基礎といえるものを中学校以降でも継承しながら育み続け、真の地域への愛着へと至らしめることが望まれる。そのためには、この両者をつなぐもの、発展させるものは何かについて、特に小学校に続く中学校段階に注目し、地域への愛着を形成しつつある生徒の属性や特徴に関する知見を得る必要がある。中学生を対象としたこの類の研究は、土崎ら(2017)が学年や性別に着目している例が見られる程度で、ほとんど見当たらない状況である。

筆者は2017年5月、茨城県神栖市の中学校において、総合的な学習の時間における地域学習の単元に取り組む予定の第1学年の生

徒に対し、その事前学習にあたる講演を行う機会を得た。そこで本研究では、地域愛着の形成途上にある中学生に関する事例的知見を得るため、ひとつの事例として当該講演の前後における対象生徒の地域愛着に関する意識変容に着目し、それぞれの変容パターンに該当する生徒らが有する特徴の探索的な検討を目的とする。

2. 方法

(1) 対象

茨城県神栖市の X 中学校第 1 学年の生徒 89 名を対象に、地域への愛着および日常生活の習慣に関する質問紙調査を行った。

2017 年 5 月 19 日に筆者による講演が行われたため、その直前の同年 5 月 16 日に、生

徒の属性や選好・習慣などに関する 15 項目と地域への愛着に関する 5 項目からなる質問紙調査を行った。前者については、探索的な分析を意識し、地域への愛着に関連性を考慮して、性別、居住経験、好きな教科、通学時間、散歩の頻度、サイクリングの頻度、天気予報を見る頻度、気温を確認する頻度、ゲームをする頻度、写真撮影の頻度、旬の野菜への意識、近所の桜の開花時期への関心、冷房温度への配慮、環境影響に関する時間軸の意識、地域の将来イメージに関する時間軸の意識、の各項目を設定した(表 1 の Q1~Q15)。後者については、Kudravytsev ら (2012) が中高生を対象に用いた place attachment scale を参照し、本研究の対象者が回答可能と判断した 5 項目を設定して (表 1 の Q16),

表 1. 質問紙調査の質問項目と選択肢

質問No.	質問	選択肢
Q01	性別を教えてください。	a) 男 / b) 女
Q02	今まで一番長く住んだ場所を教えてください。	a) 神栖市 / b) 神栖市外
Q03-01	好きな教科を教えてください。 (複数選択可)	国語
Q03-02		社会
Q03-03		数学
Q03-04		理科
Q03-05		英語
Q03-06		音楽
Q03-07		美術
Q03-08		保健体育
Q03-09		技術家庭
Q03-10		道徳
Q03-11		総合
Q04	普段の通学(片道)にかかる時間を教えてください。	a) ~5分 / b) 6~10分 / c) 11~15分 / d) 16~20分 / e) 21分~
Q05	通学以外で散歩(ペットの散歩も含む)をどれくらいしますか?	a) ほぼ毎日 / b) 週に数回 / c) 月に数回 / d) 年に数回 / e) しない
Q06	通学以外でサイクリングをどれくらいしますか?	a) ほぼ毎日 / b) 週に数回 / c) 月に数回 / d) 年に数回 / e) しない
Q07	普段、天気予報をどれくらい見えていますか?	a) ほぼ毎日 / b) 週に数回 / c) 月に数回 / d) 年に数回 / e) しない
Q08	普段、その日の気温をどれくらい確認しますか?	a) ほぼ毎日 / b) 週に数回 / c) 月に数回 / d) 年に数回 / e) しない
Q09	普段、ゲームをどれくらいしますか?	a) ほぼ毎日 / b) 週に数回 / c) 月に数回 / d) 年に数回 / e) しない
Q10	普段、写真を撮る(撮り)をどれくらい撮りますか?	a) ほぼ毎日 / b) 週に数回 / c) 月に数回 / d) 年に数回 / e) しない
Q11	スーパーなどで野菜や果物を買うとき、旬のものを意識しますか?	a) 意識する / b) やや意識する / c) やや意識しない / d) 意識しない
Q12	毎年、近所の桜が咲く時期に、いつ咲くかを確認していますか?	a) ほぼ毎日確認している / b) 週に数回は確認している / c) 花が咲く時期に 1 回は見に行く / d) まったく見ていない
Q13	普段、夏場に冷房の温度は何°Cに設定していますか?	a) ~23°C / b) 24~25°C / c) 26~27°C / d) 28°C~ / e) 使わない
Q14	もし、神栖市に新しい家やお店、工場などを作るとしたら、その環境への影響について、どれくらい将来のことまで考えるべきだと思いますか?	a) [1年後・3年後・6年後] / b) [10年後・20年後・30年後] / c) [50年後・100年後・それ以上]
Q15	神栖市の今後について、どれくらい先までイメージできますか?	a) [1年後・3年後・6年後] / b) [10年後・20年後・30年後] / c) [50年後・100年後・それ以上]
Q16-01	神栖市にお気に入りの場所がある(あれば具体的に)。	a) そう思う / b) ややそう思う / c) どちらともいえない / d) ややそう思わない / e) そう思わない (+自由記述欄)
Q16-02	神栖市には、なくなってしまおうと悲しいものがある(あれば具体的に)。	a) そう思う / b) ややそう思う / c) どちらともいえない / d) ややそう思わない / e) そう思わない (+自由記述欄)
Q16-03	神栖市について、次のことをそれぞれどう思うか教えてください。	神栖市は自分のまちだという感じがする(書ければ理由も)。
Q16-04	神栖市が好きだ(書ければ理由も)。	a) そう思う / b) ややそう思う / c) どちらともいえない / d) ややそう思わない / e) そう思わない (+自由記述欄)
Q16-05	大人になっても神栖市に住みたい(書ければ理由も)。	a) そう思う / b) ややそう思う / c) どちらともいえない / d) ややそう思わない / e) そう思わない (+自由記述欄)

※Q14・15は9つの選択肢を3つに集約して集計および分析を行った。

具体的な場所や理由の解答欄も添えた。

加えて、同年 5 月 19 日の筆者による講演の直後にも質問紙を配布し、講演を踏まえて再度、地域への愛着に関する意識の 5 項目(表 1 の Q16)に回答してもらった。講演は 40 分間程度で、「身近な自然はなぜ大切なのか?」と題し、気候変動が植物の季節現象に及ぼす影響とその時間スケールについて紹介し、続いて対象中学校周辺の 1948 年・1975 年・2012 年の各年代の空中写真を提示したうえで、同中学校に設置されている定点カメラの映像を提示して、まとめとして“環境の変化を教えてくれる身近な自然と『対話』しよう”というメッセージを生徒に伝えた。

(2) 分析

講演前の 2017 年 5 月 16 日の質問紙における地域への愛着に関する意識の 5 項目について、クロンバックの α 係数による信頼性を確認したうえで、各項目について“そう思う”を 5 点、“ややそう思う”を 4 点、“どちらともいえない”を 3 点、“ややそう思わない”を 2 点、“そう思わない”を 1 点として、尺度得点を算出した。この尺度得点に対して、生徒の属性や選好・習慣などに関する項目との関係を探索的に分析するために、項目の回答ごとに Steel-Dwass 法による多重比較を行った。

講演後の 2017 年 5 月 19 日の質問紙における地域への愛着に関する意識の 5 項目については、5 月 16 日の質問紙での尺度得点算出に用いたものと同じ項目を用いて同様に尺度得点を算出したうえで、5 月 16 日と 5 月 19 日との差を求め、この差に対する 5 月 16 日の質問紙における生徒の属性や選好・習慣などに関する項目との関係について、同様の手法により探索的に分析した。

各統計分析には、R (version 3.5.1) を用い、全ての質問項目に回答しているもののみを有効回答として扱った。

さらに質的分析として、講演前の地域への愛着尺度得点と、講演後との差分と、各々の

上位下位それぞれ有効回答数の 5% 程度の人数を抽出し、当該生徒が地域への愛着に関する質問項目で記述した具体的な場所や理由を参照し、上述の量的分析の結果と合わせての考察を行った。

3. 結果

(1) 講演前の質問紙調査に関する量的分析

75 名の生徒から有効回答を得た。地域への愛着に関する意識の 5 項目のクロンバック α 係数は 0.81 となり、尺度としての信頼性が確認できたため、そのまま 5 項目から尺度得点を算出した。この尺度得点の分布について、生徒の属性や選好・習慣などに関する項目との関係を分析した(表 2 および表 3)。多重比較の結果、地域への愛着に関する意識の尺度得点が相対的に高い生徒には、教科における国語の選好、旬の野菜への意識、近所の桜の開花への興味、地域の将来イメージへの長期性、の各項目が高い傾向が見られた(表 4)。

(2) 講演後の質問紙調査に関する量的分析

71 名の生徒から有効回答を得た。講演前の尺度得点と講演後の尺度得点との差の分布について、生徒の属性や選好・習慣などに関する項目との関係を分析した(表 2 および表 3)。多重比較の結果、地域への愛着に関する意識の尺度得点が講演後に上昇した生徒には、教科における総合的な学習の時間の選好、写真撮影の頻度、冷房温度への配慮、の各項目が低い傾向が見られた。(表 4)。

(3) 質的分析

講演前の質問紙調査で地域への愛着に関する意識の尺度得点が特に高い生徒 4 名と低い生徒 4 名、および講演前後で同尺度得点が特に上昇した生徒 5 名と下降した生徒 4 名について、講演前後の各質問紙調査における地域への愛着に関する項目での自由記述を抽出した結果、講演前の質問紙から 32 項目の記述が、講演後の質問紙から 26 項目の記述が、それぞれ抽出された(表 5)。

表 2. 各質問の回答別人数と
尺度得点中央値 (その 1)

質問No.		講演前		講演後	
		a)	b)	a)	b)
Q01	人数	38	37	36	35
	中央値	17.0	17.0	+1.0	0
Q02	人数	71	4	67	4
	中央値	17.0	19.5	0	-0.5
-01	人数	23	52	23	48
	中央値	19.0	17.0	0	+1.0
-02	人数	32	43	31	40
	中央値	17.0	17.0	0	+1.0
-03	人数	30	45	28	43
	中央値	17.0	17.0	+1.0	0
-04	人数	30	45	27	44
	中央値	18.5	16.0	0	+1.0
-05	人数	19	56	19	52
	中央値	18.0	17.0	0	0
Q03 -06	人数	15	60	15	56
	中央値	17.0	17.0	+1.0	0
-07	人数	35	40	34	37
	中央値	18.0	16.5	0	0
-08	人数	30	45	27	44
	中央値	17.0	17.0	+1.0	0
-09	人数	23	52	22	49
	中央値	18.0	17.0	+0.5	0
-10	人数	19	56	19	52
	中央値	19.0	17.0	0	+1.0
-11	人数	30	45	30	41
	中央値	18.0	17.0	0	+1.0

※ a), b)は表 1 の選択肢記号に一致。講演後の中央値は講演前との差分。

表 3. 各質問の回答別人数と
尺度得点中央値 (その 2)

質問No.		講演前					講演後				
		a)	b)	c)	d)	e)	a)	b)	c)	d)	e)
Q04	人数	19	27	21	6	2	17	25	21	6	2
	中央値	19.0	16.0	17.0	15.5	17.5	-1.0	+1.0	0	+1.0	+2.0
Q05	人数	6	18	27	9	15	6	18	24	9	14
	中央値	19.0	17.0	16.0	15.0	17.0	+2.0	-0.5	+1.0	0	0
Q06	人数	9	24	15	12	15	9	23	14	12	13
	中央値	16.0	17.0	18.0	16.5	15.0	-1.0	0	+1.0	0	0
Q07	人数	53	20	2	0	0	52	18	1	0	0
	中央値	17.0	17.0	14.5	-	-	0	+0.5	-2.0	-	-
Q08	人数	38	27	5	1	4	38	24	5	1	3
	中央値	17.0	17.0	15.0	21.0	17.0	0	0	+2.0	+4.0	+3.0
Q09	人数	35	27	4	6	3	33	26	3	6	3
	中央値	17.0	17.0	18.0	17.5	22.0	0	0	+2.0	+0.5	-1.0
Q10	人数	3	22	28	16	6	3	20	26	16	6
	中央値	19.0	16.5	17.0	16.0	14.0	+2.0	-0.5	0	+0.5	+5.5
Q11	人数	12	31	18	14	-	12	29	17	13	-
	中央値	22.0	17.0	16.5	17.0	-	-0.5	0	+1.0	+1.0	-
Q12	人数	5	18	33	19	-	5	17	31	18	-
	中央値	19.0	20.5	17.0	14.0	-	0	-1.0	+1.0	0	-
Q13	人数	9	32	20	8	6	9	30	19	7	6
	中央値	17.0	17.0	17.5	19.0	18.0	+2.0	+1.0	0	-3.0	-1.0
Q14	人数	14	37	24	-	-	13	36	22	-	-
	中央値	15.0	16.0	18.5	-	-	+1.0	+1.0	-0.5	-	-
Q15	人数	37	30	8	-	-	36	28	7	-	-
	中央値	17.0	17.0	20.5	-	-	+0.5	+0.5	-1.0	-	-

※ a)~ e)は表 1 の選択肢記号に一致。講演後の中央値は講演前との差分。

表 4. 多重比較により地域への愛着の尺度得点と有意な関係が見られた質問項目と選択肢

質問No.	講演前(5月16日)		講演後(5月19日)	
	有意水準	選択肢間の有意な差	有意水準	選択肢間の有意な差
Q03-01	*	選択 > 選択せず		
Q03-11			*	選択せず > 選択
Q10			**	しない > 週に数回 / しない > 月に数回
Q11	*	意識する > やや意識する / 意識する > やや意識しない		
Q12	*	週に数回は確認している > まったく見ていない		
Q13			*	24~25℃ > 28℃~
Q15		[50年後・100年後・それ以上] > [1年後・3年後・6年後]		

※表中の“A > B”は、Aを選択した生徒の群の母集団中央値が、Bを選択した生徒の群のそれより有意に大きいことを示す。有意水準は*が5%有意を、**が1%有意をそれぞれ示す。

4. 考察

(1) 講演前の質問紙調査に関して

教科における国語の選好に特徴が見られたことについては、地域への愛着の形成に言語能力が関係している可能性が考えられる。実際に、講演前に特に尺度得点が低い生徒のうち国語が好きでないと回答した2名の生徒は、地域への愛着に関する項目での具体的記述がほとんどされていない(表5の生徒No.17・21)。ただし、特に“(あれば具体的に)”と記述を求めた質問については、記述を回避するために点数の高い回答を意図的に避けた可能性も考えられ、地域への愛着の形成との直接

的な因果関係は断言できない。

旬の野菜への意識の高さや近所の桜の開花への関心については、これまで永野・北里(2016)など質的に主張されてきた自然や生物への関心が地域への愛着につながるという因果関係を、量的分析によって支持するものとなる。ただし、本研究の分析が因果関係を証明しているわけではなく、因果関係を仮説としたデータ取得による研究が今後行われることが望まれる。

地域の将来イメージへの長期性については、特に今後高校・大学・就職等の複数のステージを見据える中学生段階に特有の特徴であ

表 5. 各質問紙調査における地域への愛着に関する意識の尺度得点が特徴的な生徒による
地域への愛着に関する項目での自由記述内容

生徒 No.	講演前(5月16日)		講演後(5月19日)	
	尺度得点 (25点満点)	地域への愛着に関する項目での自由記述	尺度得点 (差分)	地域への愛着に関する項目での自由記述
2	24	(01) 土合グラウンド、小学生の6年間をそこで、サッカーにうちこんだから。/(02) 土合グラウンド、土合本町一丁目近くの元給食センターのとなり/(03) 母校があるから。/(04) ピーマンを克服させてくれた。	-3	(01) 土合グラウンド/(02) 土合グラウンド/(03) 母校があるから
15	13	(02) 海	-4	-
17	5	-	+9	(02) 公園/(04) 静かで暮らしやすい
21	7	-	+1	-
24	5	-	+14	-
32	17	-	+6	(01) いきいきランド
36	22	(01) やたべこうみんかん/(02) 社	-7	-
48	17	-	+6	-
63	21	(01) 茨城かんてい団/(02) タイヨーフーデリア/(03) 思い出がいっぱいあるから。/(04) 自然で、豊かな町でいいと思うから。/(05) 自然で、豊かな町だから、のんきに暮らせそうだから。	-4	(05) 自然で豊かな町だから。
66	8	-	+8	(04) 自然とあそべるから。
71	25	(01) 海や自然。/(02) 海、ピーマン、メロン。/(03) うまれたのは千葉だけど、育ちはずっと神栖市だから。/(04) 自然がたくさんだから。/(05) 東京などよりもうるさくなくてしずかだから。	0	(01) 神栖中央公園/(02) 自然/(03) 育ちがずっと神栖だから。/(04) 自然がたくさんあるし、特産物もたくさんあるから。/(05) 自然がたくさんあるから。
78	5	(01) ないです。/(02) 特にないです。/(04) お店もなにもないなから/(05) 都会にいききたい	0	(01) なにもない/(04) いなかでなにもないから/(05) 東京などの都会にでたい
81	25	(01) いきいきランド/(02) だかし屋さん/(03) 今までずっと住んでいたから/(04) 長く住んでいて思い出があるから	0	(01) いきいきランド、スーパー/(02) 虫、生き物、キジ/(05) 昔から住んでいたから。
84	15	(03) 地形などがわかってきた/(05) いろいろなことに行きたいから	-4	(02) もともとないから/(05) いろいろな所に行ってみよう
89	25	(01) 女性子どもセンター・いきいきランド/(02) 女性子どもセンター・いきいきランド/(03) 神栖市(土合)で会う人に何度も会ったことがある人ばかりだから/(04) 自然が沢山あり、静かだから/(05) 都かい人は人よしいしてしまうけど神栖市は静かだし、人よいかはしないから	0	(01) いきいきランド/(02) いきいきランド/(03) ほとんどの人と1度は会ったことがあるから/(04) 静か、自然が沢山あるから/(05) 神栖市が好きだから

※ 原文ママ。(01)~(05)は表1のQ16の枝番と一致。

る可能性が考えられる。実際に、大人になっても神栖市に住みたい(表1のQ16-05)の理由について、講演前で特に尺度得点が低い生徒のうち将来イメージが6年以内と回答した生徒(表5の生徒No.78)が「都会に行きたい」と記述しているのに対し、講演前で特に尺度得点が高い生徒のうち将来イメージが50年以上と回答した生徒(表5の生徒No.71)が「東京などよりもうるさくなくてしずかだから。」と記述しており、将来イメージにおける都会(東京)に対する捉え方の違いが顕著である。地域への愛着の形成における時間軸の要素については、より詳細な質問項目による調査が有効と考えられる。

(2) 講演後の質問紙調査に関して

教科における総合的な学習の時間の非選好に特徴が見られたことについては、今回の対象生徒において地域に関する学習が総合的な

学習の時間で行われる計画だったことを考慮する必要がある。つまり、総合的な学習の時間への漠然とした非選好が、講演前の地域への愛着に関する意識が低い回答に直結し、それが講演によって一時的に解消された、という可能性である。このことを逆説的に支持する事項として、講演前後で特に尺度得点が低下した生徒のうち総合的な学習の時間の選好を示した生徒3名(表5の生徒No.15・63・84)が、講演前には地域への愛着に関する具体的記述として講演で扱った植物以外のものを多く記述し、講演後にはその多くが記述されていない点もある。つまり、今回の筆者による講演は、漠然とした総合的な学習の時間への非選好に起因する地域への愛着に関する意識の低下を解消する効果はあった一方で、自然以外の要素から既に地域への愛着を高めつつあった生徒への配慮も必要だったことが

視られる。

写真撮影の頻度の低さについても、筆者の講演で扱った定点カメラの話題が、写真撮影に慣れていない生徒の関心を引き起こし、筆者の講演の趣旨に沿って一時的に地域への愛着に関する意識を高めるに至った可能性が考えられる。同様に、冷房温度への配慮のなさについても、筆者の講演で気候変動を扱ったことに起因している可能性が考えられる。実際に、講演前後で特に尺度得点が向上した生徒の中には、講演前に地域への愛着に関する具体的記述が全くなかった一方で、講演後には自然に関する記述をした生徒もいた（表 5 の生徒 No. 66）。

以上のように、今回の筆者の講演は、その内容に関連する選好や関心があまり高くなかった生徒に対して有効に働きかけ、地域への愛着に関する意識の一時的な向上に繋がったと考えられる。このことは、地域への愛着に関する様々な教育的取り組みが、対象者へ一様に効果を発揮するのではなく、対象者の選好や習慣によって効果が異なることを認識すべきであることを示唆している。今後、特に中学生段階において地域への愛着形成のための教育的取り組みを行う際には、本研究の成果も踏まえ、事前に対象者の選好や習慣を調査して、それに基づいて主なターゲットを意識した教育プログラムを開発することが効果的であると考えられる。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP16K16304 の助成を受けた。

引用文献

加藤亜美 (2009) : 生活科における「地域への愛着」の基盤を築くための一考察 —主に名古屋市での実態調査を通して— : 生活科・総合的学習研究 7, 123-132.

Kudryavtsev, A., Krasny, M. E., and

Stedman, R. C. (2012): The impact of environmental education on sense of place among urban youth. *Ecosphere*, 3(4): 1-15.

永野昌博・北里秋穂 (2016) : 地域愛着の醸成を目指した環境教育プログラムの開発と実践 —生物多様性への気づきと感動体験を通じて— : 大分大学教育学部研究紀要 38(1), 59-74.

桜井良・小堀洋美・中村雅子・菊池貴大 (2016) : 住民のコミュニティへの関与度や愛着が緑化意欲に与える影響 : 環境科学会誌 29(3), 149-158.

土崎伸・松村暢彦・神田佑亮・岡本英晃・加賀有津子 (2017) : 多様なモビリティ・マネジメント教育プログラムの中長期的効果特性の比較分析 : 土木学会論文集 H(教育) 73(1), 22-33.